

日常を  
愛する

松田道雄

「ハーフ・タイム」 56・1——58・9

筑摩書房

# 日常を愛する

「ハーフ・タイム」56・1——58・9

松田道雄



筑摩書房

日常を愛する

---

1983年11月25日 初版第1刷発行

著 者 松 田 道 雄

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

〒101-91 東京都千代田区神田小川町2-8

発 行 所 株式 会社 筑 摩 書 房

TEL. (03) 291-7651 (営業部)

TEL. (03) 294-6711 (編集部)

振 替 東 京 6-4123

---

装 幀 析折久美子

多田印刷・永興舎

© M. MATSUDA 1983

0095-81171-4604

## 目次

### 昭和五十六年

|    |          |             |       |    |    |
|----|----------|-------------|-------|----|----|
| 一月 | つづきたいこと  | 年賀状         | かぜ    | 年頭 | 5  |
|    | 雑景       |             |       |    |    |
| 二月 | 子どもとテレビ  | 筋ジストロフィーの子ら |       |    | 13 |
|    | 移ろいやすさ   | 親と先生        |       |    |    |
| 三月 | 責任       | 手紙のかき方      | 英国の医者 | 既  | 22 |
|    | 往歴       |             |       |    |    |
| 四月 | 光は失われても  | もう一度、責任について |       |    | 31 |
|    | 叔父の死     | しつけ         | 居間    |    |    |
| 五月 | 「育てる」15号 | 偏食ということば    | 『へ    |    | 42 |
|    | ルバー奮戦の記』 | 学校の体罰       |       |    |    |

|     |         |             |            |         |     |
|-----|---------|-------------|------------|---------|-----|
| 六月  | 自由民権    | 明治の人        | もう一度体罰について | わが日常    | 51  |
| 七月  | 薬に病む    | まぼろし        | 酒と女        | 女子高生の手紙 | 59  |
| 八月  | きのうきた青年 | 「わらぶき屋根」二十号 | 公園の朝       | アンケート   | 70  |
| 九月  | お勉強     | 障害者福祉の年     | テレビ有害論     | 湯川さんのこと | 79  |
| 十月  | 病院      | 下山先生        | 虎は死して      | 水筒      | 90  |
| 十一月 | 孫の病氣    | 人間の威厳       | 日常         | 波の会     | 99  |
| 十二月 | 広瀬東さん   | 『あすのために』    | がんの告       |         | 107 |

知 『柿の木の下で』 ゆく年

昭和五十七年

一月.....121

年頭 日帰り入院 新年集会 女子高

生の死

二月.....129

旧友交歓 二歳ちかし このごろよんだ

本 社会主義

三月.....137

恩師健在 『死の中の笑み』 モスクワは

涙を信じない 自由と平等

四月.....145

失業 平等 フラント・カフカのこと

共同生活

五月.....153

隠居 医学書 科学の進歩 おだやか

とまとも

|     |             |         |          |     |
|-----|-------------|---------|----------|-----|
| 六月  | 『雪むかえ』      | 『韓非』    | おやつをおくる会 | 161 |
| 七月  | 朝のひととき      | 国民的不安   |          | 170 |
| 八月  | 『戦時期日本の精神史』 | 老人ホーム   | タ        | 178 |
| 九月  | バコ          | 新発見の治療  |          | 186 |
| 十月  | 恍惚は恐ろしい     | 母であること  | 健康法      | 196 |
| 十一月 | 暑中見舞い       |         |          | 204 |
| 十二月 | 京の味         | セシルの教科書 | 老人医療     | 212 |
|     | 植物園         | 中国共産党   |          | 204 |
|     | 有為転変        | 異国人     | 進歩       | 196 |
|     | ス・コール       |         | 『クライシ    | 204 |
|     | 個性尊重        | 途上      | ながらえば    | 212 |
|     | 誤診          | 葬式      | 医者の不養生   | 212 |
|     |             |         | 知識人の     | 212 |

責任 行く年

昭和五十八年

|         |            |         |       |     |
|---------|------------|---------|-------|-----|
| 一月      | 今年の賀状      | ぼけること   | 不沈空母  | 223 |
| 二月      | 生きていることの意味 | 禁煙車     | 夜の訪問者 | 229 |
| 三月      | 脳死         |         |       |     |
| 腎移植     | フルンチョフ     | ガンの痛み   |       | 237 |
| ケストラーの死 | 患者に選ばせる    |         |       |     |
| 四月      |            |         |       |     |
| 日本村     | 少年非行       | 土肥さんのこと |       | 246 |
| 男と女     |            |         |       |     |
| 五月      |            |         |       |     |
| 昔の医者    | 服部先生       | 家       | 経済大国  | 253 |
| 六月      |            |         |       |     |
| 英国の医者   | ソクラテス      | 植物状態    |       | 261 |
| おっばいだより | ブラトン       |         |       |     |



七月……………271

ボランティア 栃折さんに 「ロシア・イ  
ンテリゲンチア」 新井先生

八月……………279

自愛と他愛 再就職看護婦 本日休み  
思わぬ客 まともな人間

九月……………288

罰せられない犯罪 母と娘 人間と人間  
ノーサイド

おわりに……………297

日常を愛する――「ハーフ・タイム」  
56・1―58・9



昭和五十六年



つづけたこと

年のはじめに大きなことをいってにおいて、自分をしぼるのはさげたい。あとになって恥ずかしい思いをすることがあまりにおおかった。

ただひとつ昨年からはじめたさやかな試みを今年もつづけたい。

テレビをみるのをやめたことである。

もっぱら孫たちのことをかんがえて、夏からそうしたのだった。英国にいくまえは、一年生だった上の子も、三歳だった下の子も、いわゆるテレキチであった。夕方に子ども番組がはじまってからは、ふたりともテレビのまえにすわってしまふ。夕食がはじまっても画面をみながら箸<sup>はし</sup>をうごかし、話しかけても返事は上の空だ。母親がせっかくつくっためずらしい副食も、まるでみないで、機械的に口におしこむ。食卓の団らんといったものが失われていた。

いちばんいやだったのは、くだらないドラマや、好きになれない人物のおどけてみせるのに、ふたりが声をたてて笑うのをきかされることだ。なにかよごれていく感じだった。

英国にいたるときもテレビはみたというが、子ども番組もみじかく、放映ものべつではなかったことから、一年とすこしの間にテレビばなれしてかえってきた。

連続番組で中毒のようになっていなかったのがよかった。すなおにテレビをやめられた。おとなもみないことにした。それが半年つづいている。

テレビをやめてかわったのは、食卓がにぎやかになったことだ。学校や幼稚園の様子がわかってきた。上の子思ったより本が好きであることも発見だった。図鑑の子ども用の『日本の歴史』五巻をくりかえしよんでいる。有名な人物が何歳でなくなったかを、とくによくおぼえた。五歳の子も帰国してから仮名をおぼえたのが、いま絵ばなしをつづけてよめるようになった。

子どもたちの会話のなかに、くずれた日本語のでてこないこと、下の子が少ない語彙ごいから思わぬ組み立てをすることが気持ちいい。

こちらのテレビをみない損失は思ったほどでなく、朝刊のニュースが新鮮になった。

年末にたのまれた「育児とことば」の原稿にもテレビのことにふれた。親と子との心の交信のなかに、歓迎しない第三者が朝から晩までわりこんでくるのは異常なことだ。親子の心のつながりが失われて、ことばがおくれる。それだけでなく、映像とくっつけてしかことばをおぼえないので、抽象的な思考ができない。マンガしかみない人間になる、とかいった。

年末に加藤周一さんの『日本文学史序説』をよんで（なんと楽しい一週間だったか）日本人は昔から、細部好き、抽象ぎらい、一般化が不得手と教えられ、マンガ好きはテレビだけのせいではなく、経

済大国になって自信ができ、手ばなしになり、民族の地金がたせいもあると思うようになった。

(56・1・7)

## 年賀状

アイウエオ順にならべた千七、八百通の年賀状をながめて、考えこんでいる。

早く店じまいをして、人さまへの責めをなくしてしまいたいと思うのに、賀状にかきそえられてあることは、どれもはげましてくださるものばかりだ。

「ハーフ・タイム」をよんでいるといわれるのが、いちばんつらい。店じまいの第一歩は「ハーフ・タイム」をやめさせてもらうことだからだ。

身辺の雑事をかくだけではないか、といわれるだろうが、毎週一度しめ切り日をむかえるのは、重荷だ。いろいろの人のあい、さまざまの所にでかけるといふのだと、もっとかわったこともある。診療もせず、こもりっきりの生活だから、いくら洗いざらいでも、たねがつきる。

だが、この欄をひきうけたのは、毎日かわりばえのしない生活を強いられている家庭の婦人に、新しいことばかり追いまわめなくても、生きていく甲斐はあるはずだ、ということを知らせたい「野望」からだった。



ニュースがないことは、ニュースを売っている新聞社にはこまることでも、いっぱんの人間には、平和の証拠だから、どうぞ本年もあいかわりませうということで、居直るしかない。

高官でもなく、タレントでもなく、富豪でもない人間であっても、毎日の仕事を翌日にのばさぬようにやっていけば、それはそれでなにかでありうる。七十有余年に近づきになった人たちからの賀状をながめてみると、そんな気になる。

毎日数十人のレントゲン透視をし、「しんどい」とか「せきがでる」とか「寝汗がでる」とかいってきた人たちから結核をみつける「健康相談」を六年ほどやっていたなかで、早期発見ができて、治った（治したつもりはない）人から毎年賀状をもらう。

戦争中にこちらも苦しまぎれでかいた『結核』という本をおぼえてくださった方は、その友人で結核だった人が、召集、戦災のなかも、その本をなくさずにいたという話を賀状にかきそえてくださった。

陸軍病院で受けもっていた傷病兵だった数人からも、達者でいるという知らせを年一度もらう。

町の医者になってみていた赤ちゃんも、こんどお母さんになったというその祖父からの添え書きがあった。

大阪でいっしょに研究会を数年やっていた保母さんは、定年になって、のんきなひとり暮らしを楽しんでいるという。

「ハーフ・タイム」の読者からは『母原病』がよかったというのを三通いただいた。